中川のサギ類コロニー保全対策方針

令和８年１月

中川のサギ類コロニー保全対策検討有識者会議

目　次

１．経緯 ・・・

１．経緯

中川中流部越谷市中島地区（以下、中島地区とする）の中川河川敷には、平成 13 年頃からサギ類の集団繁殖地（コロニー）が形成されるようになり、現在では埼玉県内における数少ない安定した大規模サギ類コロニーとなっている（以下、「中川のサギ類コロニー」とする）。サギ類は、主に河川や水田等の水辺でカエルや魚類、草地でバッタ等の昆虫類を採食する大型の水鳥であり、コロニーが存在することは、多くのサギ類が生息するための餌資源となる生物が周辺に生息することを表し、そこには豊かな自然環境が広がっているといえる。かつて、国の特別天然記念物であった「野田のサギ山」が同じく埼玉県の低地帯に存在していたことを踏まえると、サギ類コロニーの存在は、埼玉県の低地帯を象徴する自然環境の一つといえる。

一方で、流域のほぼ全域が標高 20m 以下の低平地であり、河床勾配は約 1/5,500（潮止橋より上流）と緩勾配のため、降雨が流下されにくく、たびたび出水に見舞われており、平成 27 年以降令和 6 年までの 10 年間に 4 回の洪水が生じている。首都圏のベッドタウンとして急速な都市化が進行してきたこともあり、浸水被害を抑えるための治水対策に対する要望が大きい地域となっている。

そこで、国土交通省関東地方整備局江戸川河川事務所では、中川流域における治水対策と健全な河川生態系の維持・保全の両立に向けて、中川のサギ類コロニーの現状と課題をまとめ、今後の保全対策に関する方向性について整理を行うことを目的として、有識者による「中川のサギ類コロニー保全対策検討有識者会議」（※1）を平成 28 年 1 月に発足した。

令和 3 年 3 月には、気候変動の水災害リスクの増大に備えるため、流域全体が協働で水災害を軽減させるための治水対策として、「中川・綾瀬川流域治水プロジェクト」が策定された。さらに令和 6 年 3 月には「中川・綾瀬川流域治水プロジェクト 2.0」に更新され、グリーンインフラの取り組みのひとつとしてサギ類コロニーの保全が挙げられ、流域全体での取り組み項目として位置付けられたところである。

これは、令和 5 年 11 月に策定された「利根川水系中川・綾瀬川河川整備計画」（※2）において、中川の中流部におけるサギ類の集団営巣地について、「周辺の河川整備による影響の低減に努め、必要に応じて代替措置について検討する。」ことが盛り込まれたことを踏まえ反映されたものである。

一方で、令和 5 年 6 月大雨（台風第 2 号）により 6 市 1 町（春日部市、草加市、越谷市、八潮市、三郷市、吉川市、松伏町）において甚大な浸水被害が発生したため、早期に浸水被害軽減を図るため、国、埼玉県、6 市 1 町が連携し、「中川・綾瀬川緊急流域治水プロジェクト」を令和 6 年 4 月にとりまとめた。これを受け、令和 12 年度までに浸水被害の大幅な軽減を目指し、国、県において中川をはじめとする河川での堤防整備や河道掘削等による洪水・氾濫対策の加速化が進められている。

中島地区においても河川の改修が実施されることから、近い将来サギ類コロニーへの影響が避けられない状況にある。こうした実情を踏まえ、中川のサギ類コロニーの保全対策の方針について、流域全体を視野に検討し、「中川のサギ類コロニー保全対策方針（以下、「保全対策方針」とする。）」をとりまとめることとした。

※1　中川のサギ類コロニー保全対策検討有識者会議について

設立趣旨

中川において、出水時の浸水被害を防ぐため、目標流量の安全な流下のための流出抑制対策や埼玉県による洪水調節施設の整備と共に、放水路による洪水調節や河道掘削・築堤・堤防嵩上げ等を実施することが必要となっている。

一方、河道掘削が予定されている中川中島地区右岸側の高水敷に繁茂したマダケ林にサギ類のコロニーが形成されている。本コロニーは、埼玉県内で数少ない数百羽が繁殖する県下最大規模のコロニーの一つであり、自然環境としても埼玉県を代表する重要な地区となっている。

このことから、中川の治水整備にあたり、サギ類のコロニーの保全方針作成のために必要な調査や対策等について指導、助言を得るため、有識者で構成する「中川のサギ類コロニー保全対策検討有識者会議」を設立するものである。

委員名簿（令和 7 年 12 月）

氏名（所属・役職）	専門分野
座長:三島 次郎 （桜美林大学 名誉教授）	生態学
浅枝 隆 （埼玉大学　名誉教授）	河川工学
一ノ瀬 友博 （慶應義塾大学 学部長・教授）	景観生態学
嶋田 知英 （埼玉県環境科学国際センター 温暖化対策担当 担当部長）	埼玉県の環境全般
堂本 泰章 （(公財)埼玉県生態系保護協会 専務理事）	埼玉県内の自然環境・地域情報
徳永 幸彦 （筑波大学 准教授）	理論生物学
葉山 嘉一 （(公財)日本鳥類保護連盟　評議員・嘱託研究員）	鳥類
益子 美由希 （農研機構 主任研究員）	鳥類・鳥害対策
小池 聖彦 （江戸川河川事務所 所長）	土木工学

※2　利根川水系中川・綾瀬川河川整備計画　令和 5 年 11 月（一部抜粋）

5.河川整備の実施に関する事項

5.1.3 河川環境の整備と保全に関する事項

(2)自然環境の保全と創出

中流部におけるサギ類の集団営巣地は、埼玉県内における大規模で安定的な箇所は希少であることから、当該地については、周辺の河川整備による影響の低減に努め、必要に応じて代償措置について検討する。

■サギ類コロニーとは

・集団繁殖性のサギ類（アオサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アマサギ、ゴイサギなど）は、河川や水田等の水辺でカエルや魚類、草地でバッタ等の昆虫類を採食しており、水辺の生態系の頂点に位置し、埼玉県の低地帯を象徴する生きものである（図 1）。
・これらのサギ類は毎年春から夏にかけて、各地の樹林や竹林などにコロニー（集団繁殖地）を形成して繁殖する。コロニーとは、鳥が集まって子育てする場のことで、サギ類コロニーは「サギ山」とも呼ばれる。
・コロニーがあることは子育てができるだけの餌資源が豊富にある良好な環境が周辺に存在することを意味する。
・埼玉県では、江戸時代から昭和 47 年まで、大規模なサギ類コロニーである「野田のサギ山」がさいたま市に存在し、かつて国の特別天然記念物にも指定されていた（図 2）。
・サギ類のコロニーの臭い、鳴き声、羽毛の飛散などが、周辺住民に嫌われ、営巣林の伐採により、コロニーが消失した事例もある。

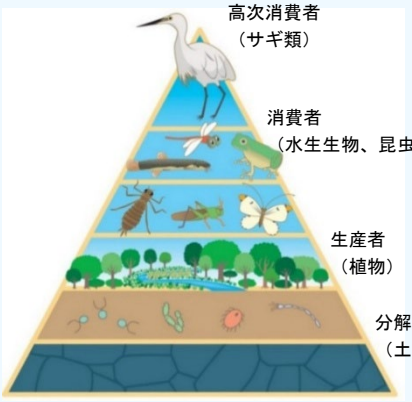


図 1　水辺の生態系ピラミッドの頂点にいるサギ類



図 2　かつて存在した野田のサギ山
出典：シラサギ記念博物館
失われた野田のサギ山の記録

２．サギ類コロニーの概要

１）埼玉県内における規模の大きいサギ類コロニーの分布

現在、埼玉県内における規模の大きいサギ類のコロニーは、中川中島地区と、荒川第一調節池貯水池（彩湖）の中の人工島（鉄塔島）の２箇所である（図 3）。大規模で長い期間存続してきた甘棠院（かんとういん・久喜市）のコロニーが令和５年に分散・消失したことから、平成 13 年頃から継続的に存続している中川のサギ類コロニーは、令和７年時点で、埼玉県内で最大かつ最古のコロニーとなり希少な場所となっている（表 1）。



図３　埼玉県内における比較的規模の大きいサギ類コロニーの分布

表１　近年のサギ類コロニーの動向

名称（地名）		敷地	現況	規模	種類	植生
1	中川のサギ類コロニー	河川区域	・平成 13 年頃に成立 ・令和５年に人的妨害行為が行われ、一部が分散	約 2,800 羽 約 400 巣 （令和６年）	6 種 （ゴイサギ、アマサギ、アオサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ）	竹林
2	彩湖の中の島	鉄塔敷地	・令和２年頃には確認されていた ・アオサギは一部鉄塔にも営巣	600 羽程度 （令和６年）	6 種 （ゴイサギ、アマサギ、アオサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ）	竹林等
A	甘棠院	私有地	・一部の樹木が数本伐採され、令和５年以降は利用されず、沼井公園に移動（直後の冬に沼井公園の樹林も伐採される） ・周辺の香取公園等も少数のサギ類が営巣しているが、今後の動向の確認が必要	150 巣程度 （平成 28 年）	5 種 （ゴイサギ、アマサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ）	竹林
B	東松山市東平地区	私有地	・平成 29 年頃には確認されていた ・3 箇所の樹林を利用していたが、近年は 1 箇所で継続 ・令和６年繁殖期より利用されなくなる。サギ類の移動先は不明	500 羽～ （令和３年）	少なくとも 5 種 （ゴイサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アオサギ）	雑木林

出典　江戸川河川事務所　2025　Ｒ６中川中島地区環境検討業務報告書を改変

２）中川のサギ類コロニー

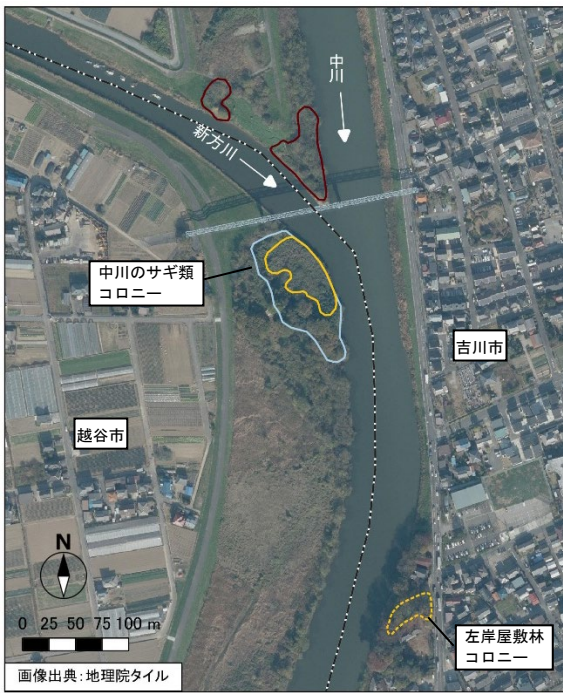
中川右岸 31.6 キロ付近（新方川合流点下流）の河川敷の竹林に、ゴイサギ・アオサギ・ダイサギ・チュウサギ・コサギ・アマサギの 6 種で構成される最大約 2,800 羽（当歳の幼鳥含む）のサギ類コロニーが形成されている（図 4）。

巣がかけられている「架巣範囲」は高さ 3m程度のマダケで構成されており、巣は地上から 1.7m～3mの高さに架けられている。また、「架巣範囲」に隣接してヤナギ類やオニグルミ、アカメガシワ、ケヤキ等の高木で構成されている「とまり範囲」がある（図 5）。コロニーの面積は約 5,700 ㎡あり、巣が架かっている「架巣範囲」は約 2,380 ㎡、「とまり範囲」は、約 3,320 ㎡である。加えて、令和 5 年から、アオサギのほか一部のゴイサギ、ダイサギが吉川市吉川地区にある左岸の樹林に移動し新たなコロニーを形成し繁殖している。

中川のコロニーへのサギ類の渡来は、アオサギが最も早く 2 月初旬から 2 月末である。アオサギに次いでゴイサギ、ダイサギ、コサギが 3 月中に渡来し、チュウサギとアマサギは 4 月中旬に渡来する。

サギ類の繁殖が終了しコロニーから去る時期は、アオサギが 8 月中旬から 9 月上旬、ゴイサギは 8 月下旬から 9 月の初旬、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アマサギは 9 月上旬から 9 月下旬である。

以上より、繁殖のために配慮が必要な期間は、アオサギは、2 月初旬から 8 月中旬、ゴイサギは、3 月上旬から 8 月下旬、ダイサギ、コサギは 3 月上旬から 9 月上旬、チュウサギ、アマサギは 4 月中旬から 9 月上旬である。



コロニー の規模	右岸：約 5,700 ㎡ （約 400 巣 2,800 羽） 左岸：約 600 ㎡ （約 60 巣）（令和 6 年）
サギ類の 種類	ゴイサギ・アオサギ・ダイサギ・チュウサギ・コサギ・アマサギ
植生 タイプ	右岸：マダケ林 左岸：ケヤキ林
マダケ密度（右岸） （本／㎡） 平均稈径 （mm）	6.00 本／㎡　26.5 mm （平成 26 年調査） 12.7 本／㎡　20.2 mm （令和 2 年調査）
コロニーの 成立時期	平成 13 年頃から成立 令和 5 年からアオサギが 左岸屋敷林に移動

中川のサギ類コロニー・架巣範囲（R6・約2,380㎡）
左岸屋敷林コロニーの架巣範囲（R6・約800㎡）
中川のサギ類コロニー・とまり範囲（R4・約5,700㎡）
上流側とまり範囲（R4・合計約2,700㎡）
市境

図 4　中川のサギ類コロニーの概要

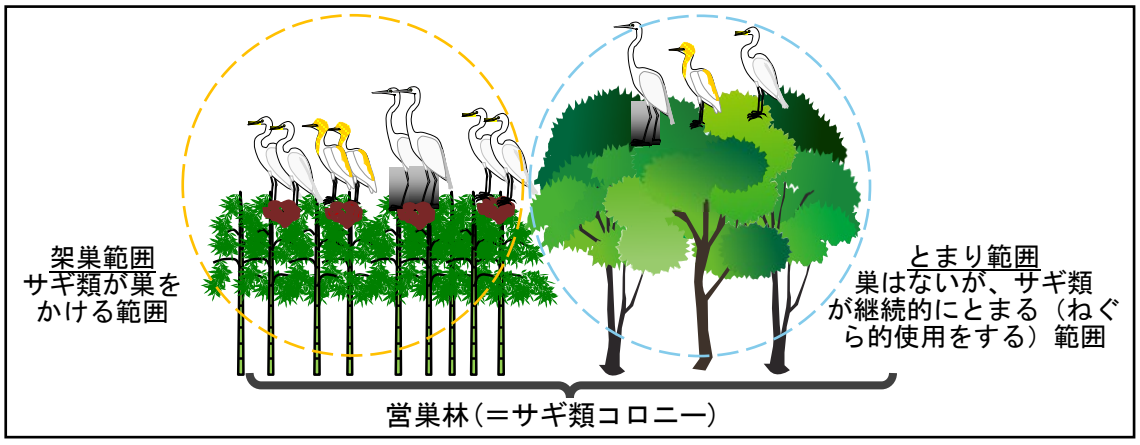


図 5　サギ類コロニーの構造（概念図）

３．保全対策方針

１）考え方

河川の改修によってサギ類の生息環境に影響が生じると予測される場合には、環境保全措置として影響の回避、低減、代償措置について検討することを基本とする。

以下に保全対策の検討を行う際の基本的な手順を図 6 に示す。

【回避】河川の改修方法の変更により現在の営巣林を現状保存し、工事前と同規模のサギ類コロニーを現在の場所で存続させること（図 7）。
【低減】現在の営巣林の掘削面積が最小となる掘削形状等の検討などにより、サギ類コロニーの規模縮小を最小限に抑えること（図 8）。
【代償】現在の営巣林は、工事によって縮小・消失するが、現在の場所（オンサイト）での営巣林の形状変更や流域内の別の場所（オフサイト）における新たな営巣林の創出によって、同規模のサギ類コロニーを流域全体で存続させること（図 9・図 10）。

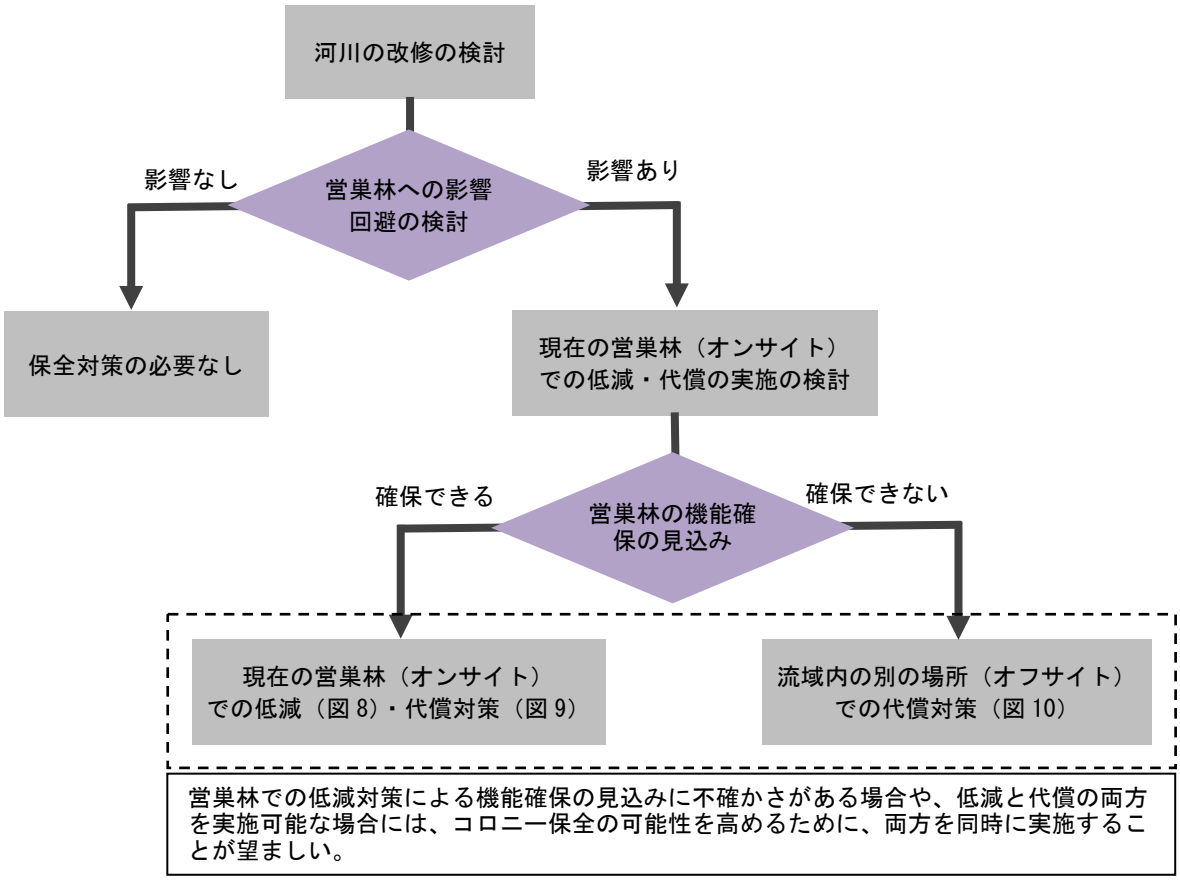


図 6　保全対策検討の基本的な手順

■回避の考え方（図 7）

・河川の改修方法の変更により現在の営巣林を改変しないで現状のまま保存し、工事前と同規模のサギ類コロニーを現在の場所で存続させることにより、影響を回避すること。

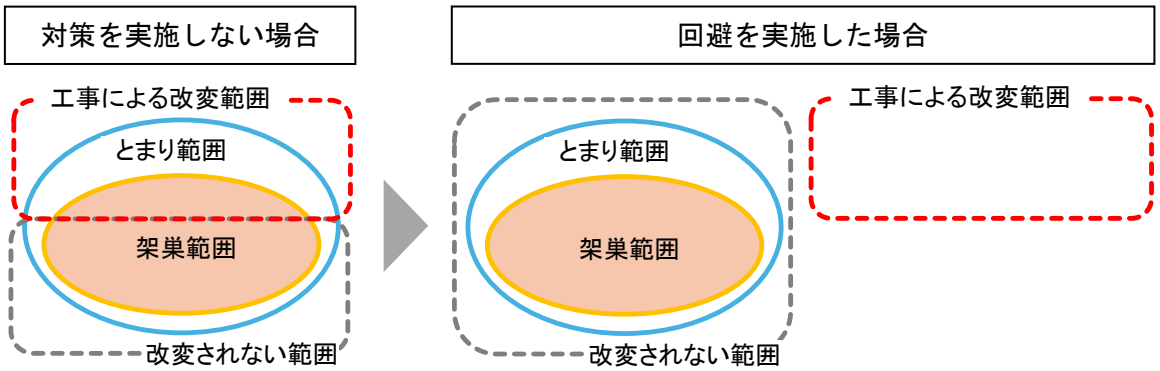


図 7　回避の模式図

■低減の考え方（図 8）

・河川の改修による営巣林の改変面積を縮小することにより、サギ類コロニーの規模縮小を最小限に抑え、影響を低減すること。

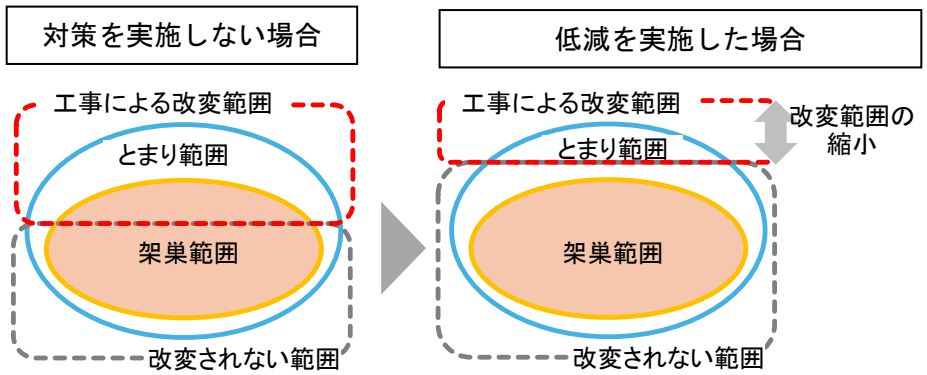


図 8　低減の模式図

■代償の考え方（図 9・図 10）

河川の改修により縮小・消失する現在の営巣林の面積を、現在の場所（オンサイト）での営巣林の拡大や、流域内の別の場所（オフサイト）での新たな営巣林の創出により代償し、流域全体で現在のサギ類コロニーと同程度の個体数の繁殖を目指すこと。

対応策 1：オンサイト（現在の場所）での代償

・営巣林の範囲を拡大するなどの対策を行い、面積を代償する。
・低減対策と合わせての実施も検討する。

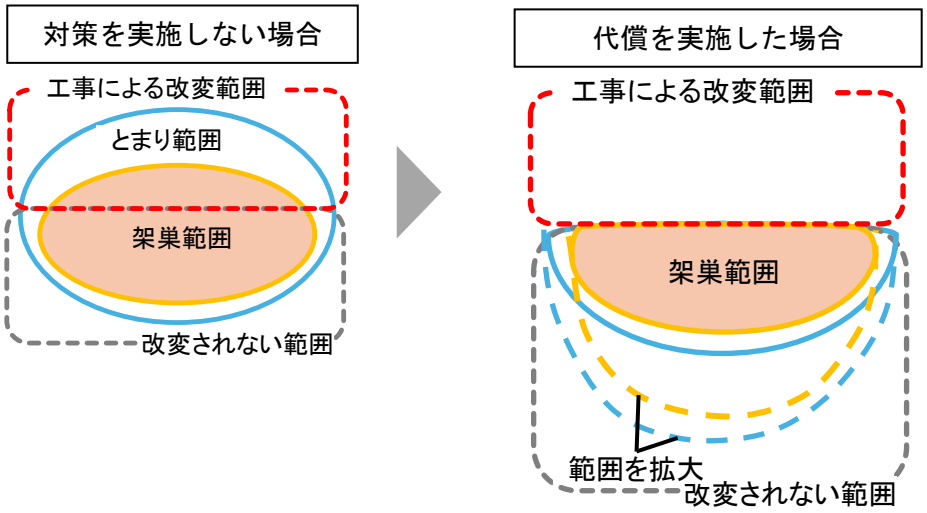


図 9　オンサイトでの代償の模式図

対応策 2：　オフサイト（流域内の別の場所）での代償

・流域内の別の場所に新たな営巣林を創出し、消失する面積以上を代償する。
・危険分散等のため、複数箇所での実施が望ましい。

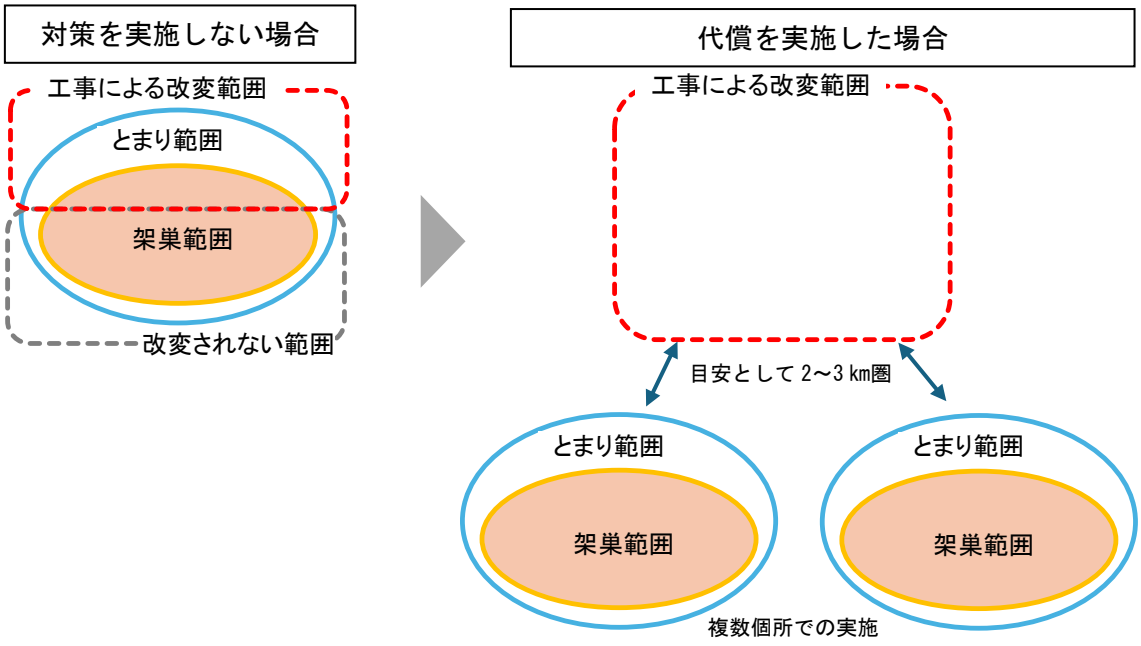


図 10　オフサイトでの代償の模式図

■低減＋代償（オンサイト・オフサイト双方での実施）の考え方

・現在の営巣林での低減対策による機能確保の見込みに不確かさがある場合や、低減と代償の両方を実施可能な場合には、コロニー保全の可能性を高めるために、両方を同時に実施することが望ましい。
・オフサイトでの実施は、危険分散等のため、複数個所での実施を想定する。

オフサイトで対策を実施する候補地の考え方を以下に示す。

【オフサイトの候補地の考え方】

条件 1：営巣林が公的な土地であること（河川区域または公園等の公有地）

・コロニーを長年存続させるために、土地の担保性があることが望ましい。

条件 2：現在のコロニーの近くであること

・コロニーが分散する場合、中島地区からの距離が目安として 2～3 ㎞圏に移動することが多いため、コロニーから近い場所が望ましい。
・過去にコロニーやねぐらが形成された記録があるなど、サギ類が利用した履歴がある場所が望ましい。

条件 3：「竹林」を主体に、構成種の営巣の適性が高い種類構成の樹林であること

・カワウが営巣しにくい「竹林」を主体とした樹林が望ましい。

条件 4：外敵からの影響を受けにくいこと

・サギ類が安心して営巣できる環境として外敵からの影響が少ない中の島の存在や、目隠しとなる樹林の存在、密度の高い竹林などがあることが望ましい。

条件 5：コロニーが形成されても周辺からの苦情などが出にくい立地であること

・サギ類コロニーは、その鳴き声や臭い、糞による汚れ等により周辺との軋轢が生まれやすいため、住宅地等が隣接していない場所が望ましい。

条件 6：将来的にも採食環境となる水田が近隣に維持されること（農業振興地域があること）

・サギ類が好んで採食する、魚やカエル等の水辺の生きものが生息する水田が維持される可能性が高い場所が近隣に分布することが望ましい。

２）検討結果

中川・綾瀬川緊急流域治水プロジェクトにより、令和 12 年度までに浸水被害の大幅な軽減を目指し、河川での堤防整備や河道掘削等による洪水・氾濫対策の加速化が進められている中で、中島地区の高水敷の掘削も避けられない状況となっている。

この実情を踏まえて、サギ類コロニーの保全対策方針について図 6 に従って検討を行った結果、中島地区の河道整備において、営巣林への影響を回避することは困難であるが、営巣林の一部は改変せず残すことが可能な見込みであるため、現在の営巣林での低減・代償対策を行うことを基本とすることとした。一方で、営巣林の機能確保の見込みに不確かさもあることから、オフサイトでの代償措置も積極的に実施することとする（図 11）。

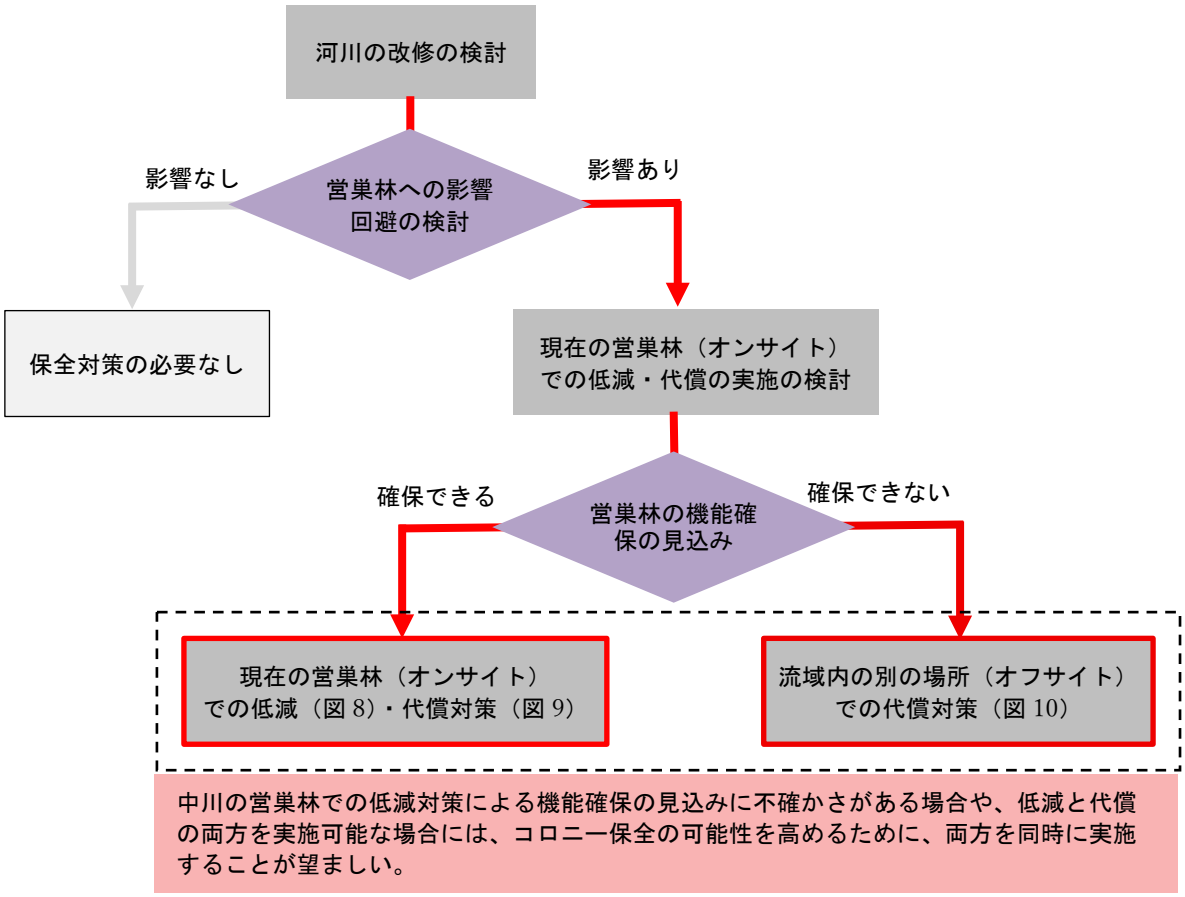


図 11　保全対策検討の結果

各措置の具体的な実施方針を以下に整理する。

【回避】
・中川・綾瀬川緊急流域治水プロジェクトに基づく洪水・氾濫対策として、中島地区の高水敷の掘削は避けられないことから、営巣林への影響の完全な回避は困難である。
・しかしながら掘削工事は、サギ類の繁殖に配慮しながら施工することを基本とする。

【低減】
・掘削形状の工夫等により、当初の営巣林が消失する計画から、営巣林の改変を最大限縮小して、サギ類のコロニーへの影響を低減する。
・架巣範囲だけでなく、外からの目隠しとなる樹高の高い樹林や、周辺の改変されない範囲など、サギ類の営巣に役立っている環境構造についても可能な限り残す。
・営巣林を中の島状の構造にするなど、外敵が侵入しにくくなるような環境構造とする工夫等により、サギ類の繁殖への影響を低減する。

【代償】
・現在の場所（オンサイト）では、「架巣範囲」も含めた「営巣林」の形状の変更により、現存の営巣林と同等の機能を確保し、サギ類が営巣可能な環境構造を維持する。
・オンサイトでの対策と合わせて、流域内の別の場所（オフサイト）へのコロニーへの誘導を流域で連携して実施し、流域全体でのサギ類の繁殖を目指す。
・オフサイトへのコロニーの誘導については、複数の候補地を選定し、サギ類の誘導や営巣林の整備により実施する。

４．コロニーの誘導にむけて：手法

オフサイトでの代償として新たな営巣林を創出するために、サギ類の誘導を目指す。必要に応じて複数の手法を組み合わせて、サギ類の反応や効果をモニタリングしながら実施する。

１）デコイによる誘導

・体色の白いシラサギ類（ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アマサギ）は、集団繁殖性サギ類の中でも特に集合性が強く、他の個体や、白いものに寄って来る習性がある。この習性を利用して、営巣を誘導したい箇所の樹上などに、シラサギ類を模したデコイ（模型）を設置する。
・誘導の効果を高めるためには、多数のデコイが必要である。そのため、既製品のデコイは用いず、白いポリ袋（リカー用）に詰め物をし、白いビニールタイで適宜結えて、実物大サギの形に整えた簡易なデコイを多数作成する[1)]。作成したデコイは、ロープや園芸用ポールなどを介して、営巣を誘導したい箇所の樹上などに、誘導箇所の規模に合わせ、多数（30～50 個）を上空から見えやすいように設置する（図 12）。
・シラサギ類の飛来を促せるよう、シラサギ類がコロニーへ飛来する時期（3 月下旬）の直前に設置する。

出典：1)益子美由希・徳永幸彦（2019）「ワイン袋は友達になれるか」日本鳥学会 2019 年度大会講演要旨集 p 117



図 12　設置したシラサギ類の簡易デコイ

２）古巣または人工巣を利用した誘導

・集団繁殖性サギ類は、毎年同じ場所にコロニーを形成する場合に、前年の古巣を再利用したり、古巣から巣材を抜いて新しい巣を作ったりすることが知られている。この習性を利用して、サギ類が繁殖に利用した古巣や巣に似せた人工の巣を、営巣を誘導したい箇所の樹上などに設置する（図 13）。
・古巣は、近隣との軋轢等の理由でコロニーが伐採される事例があった場合に、実際の古巣を回収してきて用いる。特に、アオサギの古巣は大きく目立つため、誘引効果が大きいと期待できる。
・人工巣は、樹木やササ類の枝をつる植物やアルミ線の骨格、盆ざるなどに差し込んで作成する。
・設置した古巣や人工巣は、代わりの巣や巣の材料の提供元となる。
・アオサギの飛来を促せるよう、アオサギがコロニーへ飛来する時期（2 月初旬）よりも前に設置する。



図 13　樹上に設置した人工巣

３）営巣林の整備

・現存する竹林や樹林を有効活用しつつ、営巣林を整備する。
・架巣するための場所を竹林の整備や竹を模した人工構造物を使って創出する。
・意図しない方向へのコロニーの拡大など、サギ類の飛行方向や高さ、営巣範囲の制限が必要になった場合には、営巣林周辺に樹高を超える高さのネットやフェンスを張るなど、近隣の軋轢が生じないような対応を検討する。

４）鳴き声による誘導

・飛来したサギが、すでに集まっているサギに誘引されやすい特性を利用して、事前に録音したサギ類の鳴き声を誘導したい樹林近くでスピーカーを用いて流す。
・米国・カリフォルニア州ロングビーチ[2)]やフランス・カメルグ[3)]におけるコロニー誘導の事例では、デコイと併用した実施による効果が確認されている。
・誘導に効果のある鳴き声の種類（警戒声ではない鳴き声）、音質、音量で実施する。

出典：
2) Port of Long Beach Black-Crowned Night Heron Mitigation
掲載 URL：https://www.mbcaquatic.com/project/polb-black-crowned-night-heron-mitigation
3) H.Hafner,1982.Creation of a breeding site for tree-nestng herons in the Camargue,France.pp.216-220 in(D,Scott ed.)Manual of active wetland and waterfowl management.IWRB,Slimbridge,UK

５）留意事項

・関係自治体等と情報共有をしながら実施する。
・コロニーの分散につながるサギ類の移動について、できるだけ早い段階で把握し、対策を実施する。
・当初の想定とは異なり、地域住民との軋轢の発生が予想される場所にサギ類が移動した場合には、自治体等と連携してその場所からのサギ類の追い出しを行い、別のより適切な場所での営巣を促すことも想定する。
・誘導対策で使用するデコイや人工巣のうち、ビニール等の人工物を使用し、誘導対策の終了後にゴミになるものについては誘導箇所での繁殖が認められた場合は繁殖終了後の９月下旬以降、繁殖が認められなかった場合には５月中旬以降に撤去する。木の枝などの自然物を利用したものについては残置する。

地域と連携した誘導の取り組みの事例

近隣の学校や市民団体、企業等と協力しながら、デコイや人工巣を作成し、環境学習や地域活動へと発展させ、サギ類コロニーや誘導の必要性に関する理解を幅広く醸成していくことも視野に入れる。

【コアジサシ保全のためのデコイづくりの事例】

（NPO 法人リトルターンプロジェクト）

森ヶ崎水再生センター（東京都大田区）の屋上にて、絶滅のおそれのある渡り鳥「コアジサシ」が営巣できるよう保全活動が展開されている。

保全活動のひとつとして、学校等と連携した木彫りのデコイ製作や設置イベントが行われている。



http://www.littletern.net/activity.html

５．進め方（ロードマップ）

保全対策は中川・綾瀬川河川整備計画との整合を図るため、現在の営巣林（影響の低減・代償）と、新たな場所（誘導による代償）で河道整備と並行して実施していく（表2）。

中川・綾瀬川流域緊急流域治水プロジェクトが進行する中、サギ類コロニー保全対策方針を確実に実施するため、保全対策の進捗管理、低減・代償対策のモニタリングおよび見直し等を実施するフォローアップ体制が必要である。

■オンサイト（現在の中島地区）

・治水を優先しつつ、河道整備によるコロニーへの影響を可能な限り低減・代償できる措置を実施する。

・モニタリングを実施し、必要に応じて軌道修正を行う。

■オフサイト（新たな場所）

・関係自治体等が連携し、新たな生息地への誘導対策を実施する。

・誘導箇所以外への分散の有無等も確認し、必要に応じて対策を行う。

表２　低減・代償措置の実施ロードマップ

令和６年 緊急流域治水プロジェクトのとりまとめ

令和11年～12年 中島地区での河道整備の実施

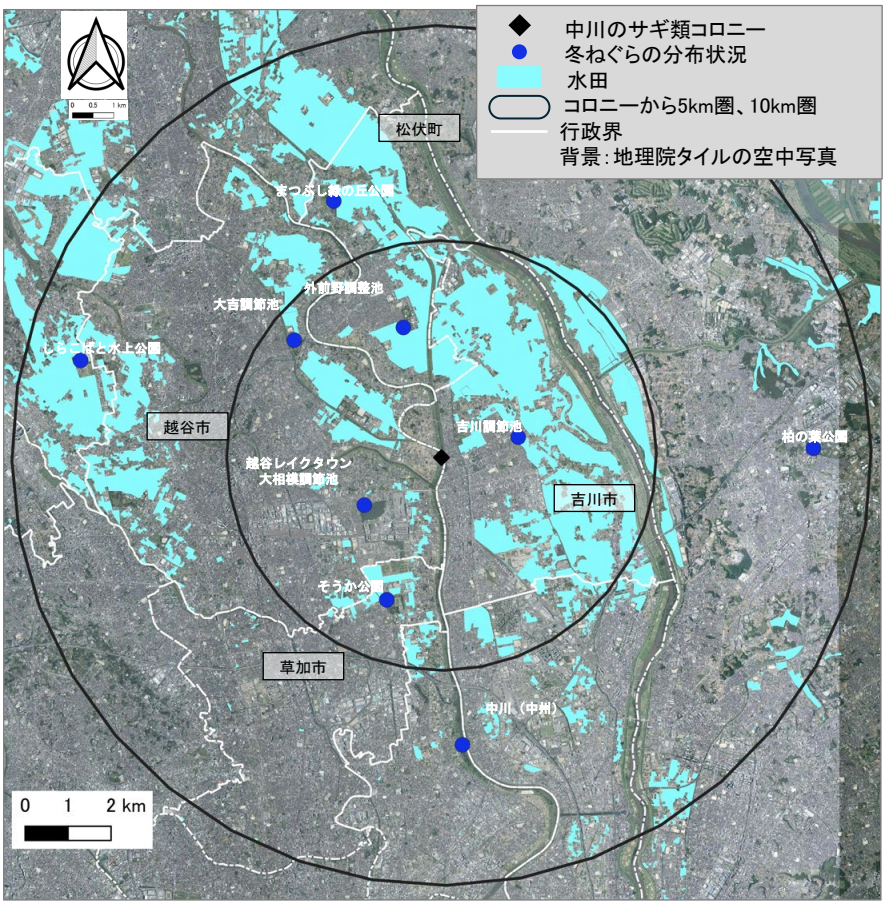
実施項目		保全対策内容の検討	保全対策の実施	保全対策完了後
オンサイト	低減・代償措置	・河道整備に伴う低減・代償措置の検討、試行の実施 【対策前の状況確認】 ・コロニーの形成時期調査 ・繁殖状況調査 （個体数・架巣範囲等）	・低減、代償措置の実施 【整備による影響の調査】 ・コロニーの形成時期調査 ・繁殖状況調査 （個体数・架巣範囲等）	・必要に応じて営巣林等の保全管理の実施 【対策の効果検証調査】 ・コロニーの形成時期調査 ・繁殖状況調査 （個体数・架巣範囲等）
オフサイト	代償措置	・誘導方法、場所の検討 ・誘導箇所の管理団体や自治体との情報共有、連携体制の検討 ・誘導対策の試行 【誘導に向けた調査】 ・サギ類の利用状況調査	・誘導対策の実施 （必要に応じて竹林等の営巣林の創出・保全管理） 【対策の効果検証調査】 ・コロニーの形成時期調査 ・繁殖状況調査 （個体数・架巣範囲等）	・必要に応じて営巣林等の保全管理の実施 【対策の効果検証調査】 ・コロニーの形成時期調査 ・繁殖状況調査 （個体数・架巣範囲等）
			・誘導箇所以外への分散の有無の確認 ・隣接コロニーの確認	・誘導箇所以外への分散の有無の確認 ・隣接コロニーの確認
フォローアップ			・保全対策の進捗管理 ・低減・代償対策のモニタリング、見直し	

６．流域全体での共生に向けた連携

中川のサギ類コロニーの保全対策では、中島地区での対策に加えて、流域での代償措置によってコロニーの誘導を図り、流域全体でサギ類と共生する方針とする。

一方で、住宅地の近隣にできたコロニーは苦情などにより消失する場合もあり、中川流域においても、営巣林の伐採等によりサギ類が分散している事例も確認されている。

令和６年３月に策定された「中川・綾瀬川流域治水プロジェクト2.0」でサギ類コロニーの保全がグリーンインフラの取り組みとして位置づけられていることも念頭に、流域全体でサギ類コロニー及びサギ類の採食環境となる水田等の水辺環境を保全していく必要がある。そのために、関係機関や地域住民など、それぞれの主体が連携し、中川のサギ類コロニーだけでなく、流域全体でサギ類コロニーを安定的に維持し、共生していくことを目指す。



・サギ類は、コロニーから10～15km圏内の河川・水路や水田でカエルや魚類を採食している。種によっては、草地でバッタ等の昆虫類も採食する
・中川のコロニーでは、南側以外には水田が広がっている
・中川のサギ類コロニーの北側の水田は、農業振興地域に指定されており、今後も水田として維持される可能性が高い地域である

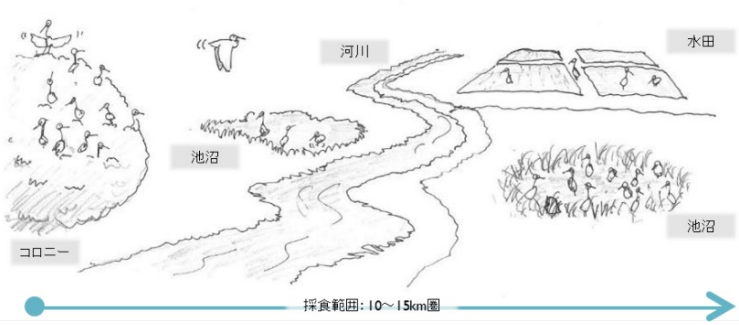


図 14　サギ類の生活圏

サギ類コロニー保全に向けて、関係する関係機関や市民団体等に期待される取り組みを以下に示す。

１）国（江戸川河川事務所）の取り組み

・河川区域におけるサギ類コロニーの低減・代償
・河川事業に伴う採食地の保全・創出　　など

２）県の取り組み

・流域におけるサギ類コロニーの保全
・調節池や公園などにおけるサギ類コロニーの受け皿づくり
・水田及び湿地環境などの採食地の保全・創出　　など

３）市町の取り組み

・流域におけるサギ類コロニーの保全
・調節池や公園などにおけるサギ類コロニーの受け皿づくり
・水田及び湿地環境などの採食地の保全・創出　　など

４）市民団体・企業、地域住民との連携

・サギ類コロニーに関連する情報発信・情報共有
・サギ類の誘導対策における協力
・モニタリングにおける協力
・営巣林等の維持管理等のための協力　　など